

弔 辞

鈴藤先生、クローバー合唱会とその後の合唱活動でお世話になりました白鳥です。弔辭の役を仰せつかりましたが、先生に私たちの活動をご指導いただいたこと以外、何も存じておらず、それも半世紀も前のことになりました。そんな私が弔辭を述べるのは誠に僭越ですが、先生との触れあいは忘れがたいことばかりで、私の考え方や生き方に、さまざまなプラスの影響を残してくださったことを、思い起こしています。

この度の先生の訃報を、メールで連絡がつく昔の仲間にとりあえず一報したところ、私と同じ思いの返信メッセージが何通も届きました。連絡がとれた人は数名ですが、卒業後も音楽を続け、今も演奏活動をしているメンバーが少なくないことからも、先生が私たちに残した影響が、ホンモノだった証しに違いありません。

先生がクローバー合唱会の指揮者に迎えられたのは 1960 年で、労音の紹介と伺いました。当時のクローバーはうたごえ運動の団体で、政治的なメッセージ性の強い歌がレパートリーでしたから、労音から来られた先生に、文化運動の指導者としての期待があったと思います。

小生がクローバーに入ったのはその翌年の 1961 年で、依然としてメッセージ性の強い歌が主流でしたが、「音楽的に上手くなつて、メッセージではなく、音楽で人を感動させよう」という流れも生まれていました。そんな中で先生は、文化運動の重要性を認めつつも、音樂性を高める練習を定着させ、厳しい練習を課し、時に癪癥を爆発させて例会の途中で帰ってしまうこともありました。そうした中で、就任 2 年目にモーツアルトとメンデルスゾーンの小曲を取り上げ、3 年目には演奏会のメインプログラムでモーツアルトの戴冠ミサを演奏し、それ以降、モーツアルトのレクイエムや、バッハ、ブラームスなどの大曲をプログラムに据えて演奏する団体に成長させました。

小生が卒業した 1964 年の秋、クローバーの OB をコアに「アカデミア混声合唱団」、通称デミ混を作り、先生に指導をお願いしました。この団体は意欲的なレパートリーで現代曲や委嘱曲にも取り組み、11 回の演奏会を行いましたが、団員が減り、小編成で演奏活動が出来るように、1972 年に現代室内合唱団、略称現唱として再出発しました。その時、先生から厳しい要求がありました。先生のメモが残っていたので、読み上げます。

「芸術家には、昨日を消し去る勇気が必要だろう。しかし今日は昨日の続きでもある。昨日は何をし、今日の何をとるかによって、明日は、どのようにも変化するだろう。

デミ混から現唱に転身したときに、ぼくはプロになることを要求した。プロになるという意味は、必ずしも音楽でめしを食うことを意味しないが、音楽で生きることに徹する意識を要求したつもりである。しかも、その音楽の中味の中心は、現代でありたいと。

音楽で生きることと現代に生きることの意味を、主体的に深くとらえることが、今、現唱に課せられた問題であろう。そしてそれを、練習や演奏で具体的に示していかなければ、ただの変身ごっこに堕してしまうだろう。中途半端なことをやっていて、いちばん困るのは自分自身であることに、現唱の人たちは気付いているにちがいない」。

結論を言えば、私たちは先生の叱咤激励に応えられず、演奏活動は1973年が最後になりました。先生に愛想をつかされても仕方ありませんでしたが、その後も細々と例会を続け、私と重富さんが海外に赴任する1979年まで、先生はつきあってくれました。

私の音楽とのつながりはそこで切れてしましましたが、1997年になって、私がひょんなことから参加した山の写真展を見に来ていただいたのが、先生との再会でした。それから2020年秋の写真展まで、殆ど毎回会場に来られて、作品を見て下さいました。

写真は音楽のような厳しい修練の積み重ねを要しませんが、対象と向き合って感性を磨き、作品を作つて発表の場をもつという点で、音楽と似ていません。

更に言えば、私が人生の大半を過ごした会社員の仕事では、自分の主体性など捨てるしかない場面が多いのですが、そんな時も、本当に大切なものは何か、何を譲ってはいけないかを心の底で考え、それを指針に判断し行動することが、人としての務めであることを、先生に与えられた大きな命題の延長として、頭の隅に置き続けてきました。

音楽と疎遠になっていた私ですが、3年前にピアノのレッスンを思い立ち、50年前に買ったままになっていた林光の「ピアノの本」を1ページから習い始め、この頃やっと少し面白くなっていました。先生にも向こう側から応援していただけると嬉しいですね。

お別れの時が来ました。先生が向こう側に行かれても、先生が心の中で生き続けている人たちが、たくさんいます。どうか安らかにお休みください。

2023年5月8日

鈴藤政宏先生

白鳥貞夫